

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 14 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520326

研究課題名(和文) 21世紀英文学における「翻訳論」の現代的課題：理論的展開及び相互関係性の考察

研究課題名(英文) Translation Studies and 21st Century Literature in English: Theory and Influence in Literary Criticism

研究代表者

早川 敦子 (Hayakawa, Atsuko)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：60225604

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：翻訳論という新たな研究領域から、20世紀から現代にいたる英語圏文学の展開にどのように翻訳論が協働しうるかを考察した。特に20世紀は戦争の世紀であったことに鑑み、負の歴史が文学を通してどのように顕現されてくるのかを、おもにホロコースト文学を対象に考えた。翻訳論は、翻訳が根本的に「他者」を言説化するという意味において、まさに歴史における被抑圧者をどう言語で表象し表現するかというところで文学に大きな影響を与えている。グローバルに展開していく文学と翻訳の密接な関係から、ナショナル・アイデンティティの構築など、現代的課題も照射されてくる。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this research project is to focus on how "Translation Studies", a relatively new field of study, could collaborate with literature in English in 20th and 21st centuries.

Particularly during the centuries of world wars, representations of the negative side of history, the Holocaust for example, have been very much concerned with re-reading history. Translation Studies often refer to "others" to be illuminated through translation, as a result of which history is re-read. A writer such as Eva Hoffman, a second generation of the Holocaust survivor, is an interesting example translating herself in a second language while writing autobiographical works. In our age of globalization today, cross-cultural interactions of literature beyond the borders cannot do without translation. In this sense also, Translation Studies are particularly relevant and engaging.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：翻訳論 英語圏文学 20世紀 現代 歴史の再読 ホロコースト エヴァ・ホフマン 記憶

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 課題設定の背景は、先立つ基盤研究 C (平成 20 年～22 年度)「現代英文学および英語翻訳文学における『ポストコロニアリズム』の表象研究」において、翻訳理論の活性化とポストコロニアル批評との相関関係から、現代英語 / 翻訳文学の展開を考察した知見がある。ポストコロニアル批評が拓いた新たな言説が、翻訳理論における「他者性」の言説化と関連づけられるところから、本研究ではさらに翻訳理論の展開を体系的に捉えることを目的とした。

(2) とくに本研究課題の特色ともいえる文脈は、英文学批評の射程に翻訳理論を引き入れることである。歴史の再読など、歴史的文化的展開を翻訳理論が活性化していることに焦点を当てることで、翻訳理論を介して、翻訳の対象となる文学テクストを歴史的な展開の中に位置付けることが可能になる。

## 2. 研究の目的

(1) 21 世紀のグローバリゼーションに対する英語圏文学の応答として、翻訳学の活性化が挙げられる。とくにポストコロニアル批評が被抑圧者の言説を照射する流れに連動して、「他者」の言説化という翻訳学の課題が注視されたことがその背景にある。本研究の目的は、翻訳学という新たな研究領域を英文学批評の射程に取り込み、翻訳理論の体系化を試みる。

(2) くわえて、翻訳理論がどのような課題を英語圏文学の領域で照射しているかに焦点を当て、翻訳学の現代的課題を文学との関連から考察することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 翻訳理論の展開

翻訳理論の体系化という目的に沿って、近年注目されてきた翻訳理論の先行研究をあとづけた。Douglas Robinson のポストコロニアル翻訳理論、Sherry Simon らの「空間」理論、Homi Bhabha、Spivak らが牽引した文学批評における「翻訳」、Paul Ricoeur らのポストモダニズムの言語的転回におけるナラティヴ理論からの翻訳論、Susan Bassnett の「文化翻訳」理論、Mona Baker の闘争としての「翻訳」、Lawrence Venuti の政治的言説としての翻訳論など、1960 年代から現代に至る翻訳理論の展開を考察し、その特徴を読み解いた。(成果として、翻訳理論を体系化した『翻訳学とは何か 翻訳が拓く新たな世紀』を出版。)

### (2) テクスト分析への援用

翻訳理論と英語圏文学の相関関係を考察するためのテクスト分析を行った。とくに 20 世紀という戦争の世紀の文学という観点から、負の歴史を「翻訳」して歴史の再読を行う意味で、ホロコースト文学を取り

上げた。前々回の科研の基盤研究 C で、すでに「ホロコースト文学」の考察を行った研究の延長から、ホロコースト文学の中でも、とくに「第二言語」で書いた Wiesel や Eva Hoffman らを取り上げ、さらに直接的体験から間接的体験の記述へと移行していくなかでホロコーストがどのように「翻訳」されているのかという変化に注目し、第二世代、第三世代の作家によるテクストも対象とした。(研究の成果として、Eva Hoffman のホロコースト論 *After Such Knowledge: A Meditation on the Aftermath of the Holocaust* を翻訳。)

### (3) 「世界文学」へのアプローチ

上記 2 段階の研究方法を通して、現代英語圏文学においても議論となっている「世界文学」とは何かという命題に繋げた。ただし、研究方法において、使用するテクストは英語の文献ならびに英訳された文献に限られると言う意味では、「世界文学」を考えていく上での文学の範疇も、さらなる精査が必要であった。翻訳論を適用していくにあたって、とくに歴史的背景からみた東欧の文学、ロシア文学などには、まだ多くの未開拓の研究領域がある。(研究の過程で得られた知見をもとに、『世界文学を継ぐ者たち 翻訳家の窓辺から』に成果を統括。)

## 4. 研究成果

### (1) 成果と研究により得られた知見

#### 翻訳理論と展開：

翻訳理論の活性化の背景には、文学批評におけるポストコロニアル批評が、文化翻訳に批判的な議論を投げかけ、英語中心主義を基盤とする言語帝国主義と翻訳の結託を照射したことがある。すなわち、言語学の領域における「等価理論」などをもとにした翻訳論は、文化批評への注目の過程で、新たに歴史の再読というテーマを内包して展開していったことがあとづけられる。

歴史の再読は、「自己」を中心とした歴史の基軸を「他者」へと移行させることで、そこに新たな「他者」を招き入れることになる。翻訳は、まさにそういった意味で「他者」との関係性の構築を模索する過程に介入する行為であることが明らかである。こういった視点で、たとえば Spivak のサバルタン研究や、Edward Said の「故国喪失」のテーマも再読を促すテクストとして読み解くことができる。

こうした「他者への注視」が、翻つ Damrosche らが提起した World literature、すなわちゲートの時代にドイツロマン主義を背景にして概念化された「世界文学」とは異なる、むしろ比較文学・比較文化からの視点で捉えられる「世界文学」研究への関心を喚起したといえる。翻訳論は、こ

ういった文脈でしばしば言及されることを通して、さらにグローバリゼーションにどう働きかけうるか、政治的言説からも論じられるようになってきている。とくに東西の亀裂、南北の格差という「権力構造」が、翻訳者の意図に与える影響、市場原理における翻訳のマーケットの不均衡が翻訳理論でも指摘され、翻訳者の「倫理」もまた、現代的課題として照射されるようになってきている。

このような課題と向き合いながら、弱小言語とナショナル・アイデンティティの問題、リンガ・フランカ（世界言語）をめぐる言語論などにも、翻訳理論の領野が広がっている。

このような成果については、『翻訳論とは何か 翻訳が拓く新たな世紀』（2013年2月、彩流社）に統括した。

内容は、以下の通りである。

第一章「文化批評としての『翻訳』 ポストコロニアル批評と翻訳論

第二章「再・読／記述としての『翻訳』

モダニズム後と歴史の解体」

第三章「『他者』を語る言説 『物語』への注視

第四章「忘却への抵抗 ホロコーストを語る自伝」

第五章「世界文学とは何か 越境のアポリアを越えて」

歴史の再読：

上記の研究方法の「負の歴史」の継承という観点から、具体例としてホロコースト文学をテキストとして分析することにより、ホロコースト文学がまさに「翻訳不可能性」への挑戦であったことが明らかになった。とくに第一世代の作家によるホロコーストの言説は、しばしば回想や記憶というかたちをとるが、その過程で「言語を越える経験」をどのように認識し、咀嚼し、さらに表現へと昇華させていったかが何人かの作家たちに共通の問題として浮かびあがってくる。ここで指摘できるのは、そのような過程が「自己翻訳」としての意味をもつということであった。たとえばポーランドからカナダへと移住することで母語を喪失して、第二言語である英語で自身の第二世代としてのホロコースト体験を自伝で著わした Eva Hoffman は、新たな言語によって自己を対象化する作業を通してトラウマから解放されたことを記しているが、その過程を自身が「自己翻訳」として捉えている。彼女にとっては、自伝を書く行為そのものが、言語と自身と関係性を構築していく「翻訳論」であると述べ、そこから歴史の再読、すなわち「ホロコースト」の意味の検証が可能になることを示唆している。

このようなメカニズムは、負の歴史と言う意味では、ホロコーストのみならず、南

アフリカのアパルトヘイトから、さらに日本では広島、長崎の被爆の伝承という歴史の課題にも見られる。アウシュヴィッツ、広島・長崎、ルワンダ、カンボジアを繋ぐ視点から開催された国際シンポジウムに基調講演者として提起した問題は、まさにこういった「翻訳」という行為の解釈を歴史の再読にまで拡大することであった。

「翻訳理論」と「世界文学」の協働性：

翻訳理論の展開を体系的に捉えていくことで、現在英文学の領域でも議論をよんできた「世界文学」が、その延長線上にあることが明らかになった。もとより、ゲーテの「世界文学」という言葉は、「翻訳文学」の重要性を喚起するものであったことに鑑みれば、越境性を可能にする翻訳が「世界」に共通の言説としての「世界文学」と密接な関係性にあることは自明の理と言える。問題は、そこに立ち現われてくる「他者」と「自己」の関係性の構築のありようであり、その関係性のせめぎあいのなかで起こる摩擦や「交渉」が、翻訳理論の中でもキータームとして理論化されているように、現代的課題でもあるといえる。

こういった観点から、敢えて「越境性」を前景化するテキストを分析の対象として、おもに「歴史の再読」と「他者性への注視」をテーマに論じた試論が、『世界文学を継ぐ者たち 翻訳家の窓辺から』である(論文や著書については以下の5を参照)。

## (2)成果の意義と位置付け

成果については、各段階で『紀要』等で公開し、英文学研究者にとどまらないフィードバックを得ることで、「翻訳学」という研究領域の学際性を再認識するに至った。とくに、言語の多様性という意味では、「世界文学」を論じるにあたって他言語の研究者との連携はひじょうに有益かつ必要であった。今後の展開においても、学際的アプローチは必至であろう。

翻訳理論を実際に適応したテキスト分析の過程で、「翻訳」の実践を並行して行ったことが、或る意味での成果の意義の一つであると言える。例えば、多言語から言語文化論を展開した Roger Pulvers の言語論『驚くべき日本語』（邦訳）、南アフリカでの子ども時代を言語文化的視点から捉えなおした Elleke Bohermer のエッセー“Here nor There”など、翻訳理論を視座に入れた翻訳の過程で、テキストの中に内在する「翻訳可能性」が、テキストの本質において重要な要素であることが明確になった。

上記「世界文学」の議論の中で、翻訳論を一つのアプローチとして適用することで、文学研究と翻訳学研究的の両方に新しい

可能性が見出されるであろう。細分化していく文学研究の方法論とは異なる方向性がそこに示唆されていると考えるが、言語文化的、さらに歴史的、政治的言説としての文学の側面が、翻訳理論によって照射されることはきわめて興味深い。

### (3)今後の展望

「歴史の再読」でも触れた「負の歴史の伝承」という課題は、とくに戦後 70 年に向かう現在、大きく取り上げられていく文学のテーマでもある。さらにそれを「世界地図」という射程で考察していくなかで、「世界文学」とは何かという命題にも繋がっていくと思われる。

もう一つの側面として、歴史の再読が、個人の言説を起点に始まってきたことから、「個人史」「自伝」「回想」「記憶の記述」「証言」などという要素を核とする言説に光を当てた研究も必要だと考える。

ひいては、そこから「文学」が歴史とどう関わりうるか、という根本的な命題にも言及していくことが望まれる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### [雑誌論文](計 5 件)

早川敦子「他者への試練 遠藤周作『沈黙』に見る翻訳的空間」、津田塾大学『紀要』、査読有、第 46 号、2014、33-56.

早川敦子「記憶の翻訳:Lyndall Gordon の回想記を巡る考察」、津田塾大学『紀要』、査読有、第 45 号、2013、107-126.

早川敦子「自己と世界の境界: Elleke Boehmer の場合」、津田塾大学『紀要』、査読有、第 44 号、2012、19-35.

ATSUKO HAYAKAWA, "Translation as Politics: The Translation of Sadako Kurihara's War Poems," 査読有、*Traduction, Terminologie, Redaction*. Vol. XXV, numero1, 1<sup>er</sup> semestre 2012, 109-131.

早川敦子「自己翻訳から歴史の再読へ: エヴァ・ホフマンと二つの『自伝』」津田塾大学『紀要』、査読有、第 43 号、2011、109-125.

### [学会発表](計 3 件)

早川敦子「未来への記憶 新たな地平を求めて」(招待講演・基調講演)国際シンポジウム(広島平和研究所・中国新聞社) 2013 年 12 月 7 日、広島国際会議場

ATSUKO HAYAKAWA, "Here nor There: Narrative of Children's Books and Translation Theory," IBBY World Congress, 23 August 2012, Imperial College, University of London, UK.

ATSUKO HAYAKAWA, "Second

Movement as Human Legacy." (Key-note Lecture), 22 October 2011, The Second Movement in Oxford, Hertford College, Oxford, UK.

### [図書](計 4 件)

早川敦子『翻訳論とは何か 翻訳が拓く新たな世紀』、2013 年 2 月、彩流社 (272 ページ)

早川敦子『世界文学を継ぐ者たち 翻訳家の窓辺から』、2013 年 9 月、集英社新書 (252 ページ)

早川敦子 (14 名、巻末)「記憶の道標 『ホロコースト』を語ること」(特別寄稿)、『<平和>を探る言葉たち 二世紀イギリス小説にみる戦争の表象』、2013 年 3 月、鷹書房弓プレス (329-358)

早川敦子 (10 名、編著)「他者を語る試み エヴァ・ホフマンにみる翻訳の『不可能性』と『可能性』」、『終わりへの遊行 ポストコロニアリズムの歴史と使命』、2012 年 3 月、英宝社、(274-306)

### [その他](計 2 件)

翻訳 早川敦子『驚くべき日本語』(原著 Roger Pulvers) 2014 年 1 月、集英社インターナショナル、(185 ページ)

翻訳 早川敦子『記憶を和解のために: 第二世代に託されたホロコーストの遺産』(原著 Eva Hoffman, *After Such Knowledge: Meditation on the Aftermath of the Holocaust*)、2012 年 8 月、みすず書房、(304 ページ)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

早川敦子 (HAYAKAWA ATSUKO)

津田塾大学教授

研究者番号: 60225604